

# スイク教祖ナーナクの神観念

橋 本 泰 元

## 1. はじめに

ナーナク〔曰く〕、〔ひとは〕苦しむ、4 ユガのあいだハリ（神）の名号が心に住まず<sup>\*1</sup>。

〔神との〕別離はなんと〔痛ましい〕別離か、〔神との〕合一はなんと〔喜ばしい〕合一か<sup>\*2</sup>。

この引用のように、ナーナク（Nānak）の教説集には簡潔な表現が一般的である。この引用した二節はすべての人生と宗教の究極の目標に係わり、神の名号を自心の内部に住まわしめることによって、永劫の歓喜を付与する神との合一を宣言している。このことに覚醒し、この提示された方法を受け入れ、そうして神との合一を獲得した者は、輪廻転生を超越し、無限で永遠な、しかしながら言表不可能な歓喜の状態へと到るのである。

しかし、このような要約は、グルー（Gurū）＝ナーナクの信仰の発展過程に光を当ててこそ意味をなすのである。この合一を目指すべき神とは誰か、何か。その属性はいかようか。神の存在がどのように人間に表現されるのか。そして人間とは？人間はどのような状態で輪廻世界を越えるのか。提供された方法とは何か、そして人間はその方法をどのように獲得するのか。獲得したあと、人間は再生した状態を、言葉の能力がある限りにおいて、表現できるのか。このような多くの問題は、ナー

---

\*1 nānaka dukhiā juga cāre binu nāma hari ke manī vase || 4 || (Tukhāri 2, GS, p.1110)

\*2 vichuṛiā kā kiā vichuṛai miliā kā kiā melu || (Mārū 1, GS, p.989)

ナクの信仰を、言い換えれば彼の教学を適格に理解するためには、回答されるべきであろう。

教学という言葉は、この場合、適切な言葉である。なぜならば、ナーナク思想全体が神に関する彼の理解を中心に展開しているからである。聖典編纂者グルー＝アルジャン (Arjan) が『グルー・グラント・サーヒブ』 (*Gurū Grantha Sāhiba*以下GSと略記) の冒頭に神の属性の宣言文を配置し、それが根本マントラ (mūla mantra) と呼ばれていることはまさに相応しい。スィク教の聖典群のなかで、グルー＝ナーナクのジャプジー (Japjī)<sup>\*3</sup>以上に重要なものはない。この絶妙な作品の主題は神であり、人間が崇拝すべき神、人間の心理が創り出しうる非常に高度な観念を遙かに超えた神なのである。グルー＝ナーナクのサバド (sabada < śabda) やサローク (saloku < śloka) に見だし得るのがナーナクの教学であり、洗練された神学なのである。

もちろん、この教学は体系的に提示されたものではない。グルー＝ナーナクの著述は彼の神の直接的な経験を証言するものであり、その経験の特徴的な表現方法は讃歌なのである。グルー＝ナーナクもグルー＝アルジャンも、ナーナクの信仰を統合的な形式で著そうとはしなかったので、われわれも、そのことを期待してはならない。彼らの宗教は本質的に経験的なものであり、理念的であるよりも実際的なのである。しかし、われわれがナーナク思想の本質を理解するためには、統合的で体系的な提示のほうが良いのであるので、ここでは、そのようなパターンを探らなければならないであろう。

グルー＝ナーナク思想が体系的に表現されていないということで、われわれは彼の思想に一貫性がないと見なしてはならない。それどころか、ナーナク思想の最大の特徴はその一貫性にあるのである。GSの後半部分に配置されている他の聖者バガット (bhagata < bhakta) の著述とナーナクを比較すれば、分かるであろう。例えば、カビールの思想はたいへん特徴的なものであるが、教学的にはナーナクほど一貫性があるとは言えない。絶対なる神の慈悲深い行為と自由意志をもった人間の必要な参画、これら両方を支持する体系に欠かせない緊密な教学は確かに

---

\*3 GS, pp.1-8.

存在するのであるが、ナーナクの思想の構成要素を抽出し、それらを神学体系に適合させようとするものは、相互に矛盾する言説を選択的に判断してはならない。また、カビールの思想の中に見られる曖昧性の程度をもって取り組んではならないと思われる。

現段階で、カビールとの比較は教訓的である。グルー＝ナーナクとカビールは、両者とも宗教的統合を提示し、どちらの場合も、その統合の考えたかはその人柄を反映している。かれらの思想のその後の影響の関する限り、まさにこの点が非常に重要なのである。カビールはなかなしく神秘主義的であり、彼の思想のパターンはこの点から理解されうる。その結果は、彼の思想は深淵であり幽玄である。カビールの言説はたいへん広く人口に膾炙してきたが、その思想の広まりは限定されたものであった。カビールに人気をもたらしたのは、その含蓄のある言説であり、印象的な箴言である。カビールの直系の弟子を主張するカビール派は信仰体系をもっているが、それは宗派の名に冠せられた開祖の本来の思想とはほとんど似ていないものとなっている。

これとは対照的に、ナーナクは一貫したパターンを創り出し、それは、後代のグルーたちの付加とともに今日に到るまで正統的なスィク教によって守られている。ナーナク自身も、カビールと同様、神秘主義的であり、彼の思想の頂点は、無形相なる一者である神との言表不可能な合一のなかに見いだしうる。この頂点そのものは分析を越え表現を絶しているが、そこに到る経路はそうではない。また、この点についてナーナクはカビールより明確である。神秘主義に深い理解をもつ人ならば、カビール自身が経験した深い意味のなにものかをカビールの言説のなかには確かに見だし得るだろうが、たいがい人はそうではないだろう。むしろ多くの方は、ナーナクが述べようとしたパターンを理解できるであろう。なぜならば、それはより理解しやすい言葉で表現されているからである。グルー＝ナーナクが後継者を指名したという事実は、自己の教えの永続性という点からすれば非常に重要なことであるが、しかし、それが現代のスィク教の存在を説明する唯一の理由ではない。ナーナクの思想の明確性と一貫性も、根本的に重要な要因なのである。

グルー＝ナーナクにとって、人間存在の意味と目的は、世界を創造・維持・破壊し、世界において自己を顕現し、恩寵によって人間に救済方

法を伝え、解脱に至らしめるために人間の対応を喚起する永遠なる一者に集中する。この至高の主に対峙して、人間は提示された救済の道から自らを切り離して墮落した状況にいる。正道をはずれ不従順で、現世の虚ろな魅惑に騙されて、人間は輪廻世界に自らを強く縛りつけ生死の無限の円環を余儀なくされる。

しかし、人間には、この悲惨な自己中心的な生活と連続した輪廻転生の世界から脱出する方法が用意されている。神は、自身の教令 (hukam) によって世界を創造し統御し、洞察力のある人間はそのなかに神のあり方の表現を見ることができるのである。この欠くことのできない洞察力が人間のなかで、グルー (導師) によって、神秘的に発せられる神の声によって覚醒される。人間は、グルーの声を聞き対応すると、自己の周りのすべてのものや自己が経験するすべてのことに顕現している神の「ことば」(śabda) を理解し始める。人間に必要な対応は、神の名号 (nām < nāman) に対して、また創造世界やその世界の内部における経験を通して伝えられる神の本性に対する瞑想を通して表される神の愛を敬慕すること (bhakti) なのである。この厳格な原理に自己を投じる人間は、自己の不浄から洗われ、漸次、神に接近することができる。人間は、この精神的段階を向上し、終には窮極の、永遠なる一者との言表不可能な境地に到り、世俗的な束縛から解き放たれ輪廻転生がついに終局する状態となる。

このような多くの観念を、ナーナクはカビールを含む中世初期や同時代の宗教家たちと共有している。ナーナクの思想は、北インドのサント (sant) の思想と緊密に関係していることは明らかであり、ナーナクの思想の多くはこの源泉から直接派生していることは疑いない<sup>\*4</sup>。

## 2. ナーナクの神観念

唯一のオーム (聖音) が真実在 (神) の名号にして創造者なり、無畏にして憎しみなく。

時を超えて形像をなし、不生にして自在なり、グル (導師) の恩寵

\*4 拙著『インド中世民衆思想の研究』(ノンブル社、2006年)、pp.471-478.

によって〔その神は知られる〕\*<sup>5</sup>。

GSのこの冒頭の根本マントラほど、グルー＝ナーナクの根本思想を示している語句はない。スィク教信仰のほとんどの解説はこの根本マントラに言及し、多くの注釈書がこの語句に相当のスペースを与えている。

しかし、この言説は、それ自体、多くは語っていない。篤信のスィクには多くの意味を与えるが、それは個々の語彙の意味を理解している場合である。個々の語彙自体は自明のものではなく、個々の意味を理解する方法でこの根本マントラを理解しようとするれば、グルー＝ナーナクの総合的な教学に合わないかも知れない。特に、聖音オームはナーナクの他の章句を参照しなければ誤解されやすいだろう\*<sup>6</sup>。これを解釈するには、ナーナクの教学全体のなかで行われるべきである。根本マントラは、ナーナク思想の理解の出発点であり、また同時に最終的な要約でもあるのであろうが、この間を埋める作業が残っている。

## 2-1. 神の単一性

根本マントラの冒頭に数字1があり、スィク教の伝統は一致して、この1が神の単一性の宣言であると認めている。このような見解は、ナーナクの言葉のなかで強く強調されているから、至極当然である。

自ら顕れた、神は、三界に。ユガ毎に〔神は〕施与者であり、他に誰もなし\*<sup>7</sup>。

「他に誰もなし」という言葉は、ナーナクが繰り返し使う特徴的な表現である。ナーナクにとって神は1、すなわち唯一なのである。

\*<sup>5</sup> 1 om̐ satināmu karatā purakhu nirabhaū niravairu akāla mūrati ajūnī saibhaṁ gura prasādi || これがパーイー＝グルダースによる祈願の句の派生形に付けられた名称で、根本マントラと呼ばれている。ちなみにグルー＝ナーナク自身は、神の名号が根本マントラであると述べている (Mārū 1-5. GS, p.1040)。

\*<sup>6</sup> rāgu rāmakalī dakhaṇī, GS, pp.929-938で聖音オームについて詳説されている。

\*<sup>7</sup> jāpai āpa prabhū tihu loi || jugi jugi dātā avaru na koi || (Oaṅkāri GS, p.933)

六軒の家(学派)、六人の導師、六つの教え。導師の導師は一人、多くの姿〔をとる〕\*8。

しかしながら、この単一性の言明は、明らかに問題を呈する。すなわち、一神教なのか一元論なのか、ということである。神の単一性、すなわち神が他の存在と完璧に相異していることを指しているのか、ということである。あるいはまた、この単一性はすべての現象的存在の存在を否定しているのか、ということである。

両極にあるこれらの二つの見解を選ばざるを得ないとすれば、前者を選択すべきなのである。グルー＝ナーナクの思想は、彼の神観念をシャンカラ哲学のいう窮極的に非存在である主宰神(Īśvara)と同一視しなければ、不二一元論(advaita)の範疇に一致させることはできないだろう。

他方、ナーナク自身、人間の本質の問題として「二元」(dubidhā < dvidhā)の観念があり、この二元の克服が人間の救済にとって非常に重要な側面であると、明言していることを認めねばならない。さらに、ナーナクが神の内在性と、人間の救済にとって神の内在的啓示が基本的に重要であることを力説していることも知っておかねばならない。彼の思想のこのような面に注意を払いつつ、述語を選択しなければならないのである。ナーナクの思想が一神教であると示す場合に、セム系の意味で捉えてはならないことは当然である。

グルー＝ナーナクの思想は、本質的に神秘主義者の思想として理解するのが最善であろう。「二元性」は最終的に克服されるのであるが、神秘的合一のなかで吸収されるものである。創造世界は神の核心的な開示をもたらさないが、しかし、この開示を分与する現象世界は、創造世界ばかりでなく、それを超越した世界に住する神の恩寵の表現と見なされなければならない。神の窮極の本質は、人間の全ての能力をはるかに超越しているのである。神は、経験によってのみ知られるのである。実に、人間はこの神秘体験に人間としての表現を与えることに努めるべきであ

---

\*8 chia ghara chia gura chia upadesa || guru guru eko vesa aneka || (Rāgu Āsā 1, GS, p.12, Āsā 30, GS, p.357)

る。そして、グルー＝ナーナクの言説はまさにこの目標のために向けられているのである。しかし、人間の表現能力は、窮極の实在の一瞥以上のことを伝える能力はないのである。

この神秘的な経験とそこに到る道程についてのグルー＝ナーナクの表現は、人間が述べる神は人格をもった神、人間が愛情をもって応える恩寵の神として観念されるものである、と簡潔に示している。ナーナクが神を創造者として理解しており、神の恩寵を繰り返し強調していることが、このことを明示している。カビールの場合と同じように一元論的な言説が述べられているが、しかし、一元論的な思想構造はナーナク思想にはあり得ない。教義の汎神論も除かれている。なぜならばナーナク思想には、内在性の観念が超越性の観念をともなっているからである。

唯一の神の表現の多様性を強調しているが、このことは創造世界を通しての神性の開示という観念と関連させて考えなければならない。ヒンドゥー教神話における神々が神の活動の特定の相を表現する象徴としてよく使われるという意味においてではなく、複数の神格によって暗示される一神教という観念は、ここでは持ちだすべきではない。事実、グルー＝ナーナクはヒンドゥー教の三神一体説 (trimūrti) の観念を受け入れ、その傍証が『ジャクジー』の第30偈にあると、かつて言われたのである\*<sup>9</sup>。これに関係なく、第30偈は次のように翻訳できる。

同じように一人の母が妊娠、三人の弟子を生んだ。

一人は世界創造者、一人は保持者、一人は〔死の〕命令を執行する者 (破壊者)\*<sup>10</sup>。

しかしながら、スィクの多くの注釈者たちは、この文言を「・・・と信じられている」というような言葉をつけて翻訳したり、言い換えしている。ナーナクの言説とナーナクが神の単一性を繰り返し強調しているこ

---

\*<sup>9</sup> P. D. Barthwal, *Traditions of Indian Mysticism based on Nirguna School of Hindī Poetry*, New Delhi: Heritage Publishers, 1978 (1st ed. 1936) p.255.

\*<sup>10</sup> Japji, 30, GS, p.7. ekā māi jugati viāi tīni cele paravāṇu || iku samsārī iku bhaṅ-dārī iku lāe divāṇu ||

とに照らし合わせてみれば、この付加は確かに是認されうる。この偈は、神の絶対的な權威を強調する文言へと続く。

〔しかし〕汝は彼らを汝の気に召すままに動かし（命じ）、彼らは〔汝の〕命令に従う<sup>\*11</sup>。

この詩句で、ナーナクは神自身が創造者であり保持者であると明言する。

〔神の〕座が世界であり、世界が〔神の〕貯蔵所である。  
獲得したもの、それは一度なり<sup>\*12</sup>。  
創造し創造して、創造者は〔その世界を〕見ている。  
ナーナク〔曰く〕、真実が真実〔の神〕を成す者なり<sup>\*13</sup>。

ナーナクは確かに、彼がその存在を実在と見なしていることを暗示するような方法でブラフマー、ヴィシュヌそしてシヴァに言及しているが、しかし、それらが唯一の神の被造者であり、すべての機能をなくしマーヤー（幻力）と死に従わざるを得ない存在として表現されている。唯一の神は、ブラフマーを創造しただけではなかった。神は世界も創造し、神が世界を保持するのである<sup>\*14</sup>。唯一の神自身が、創造者、保持者そして破壊者であり、これらの機能を執行して、すべての神々を無意味な影と至らしめる。

ブラフマー、ヴィシュヌそしてマヘーシャは唯一〔の神〕の顕現、〔その神〕自身が〔すべての〕行為をなす者なり<sup>\*15</sup>。

かれらは、例証として時折役立つ便利な存在に過ぎない。

<sup>\*11</sup> jīva tisu bhāvai tivai calāvai jīva hovai phauramāṇu ||

<sup>\*12</sup> 「神が創造したものは、神が一度だけで創造した」の意味と考えられる。

<sup>\*13</sup> āsaṇū loi loi bhaṇḍāra || jo kichu pāiā su ekā vāra || kari kari vekhai sirajaṇahāru || nānaka sace kī sācī kāra || (Japī, 31, GS, p.7.)

<sup>\*14</sup> Mārū Sohalā 15, GS, p.1036.

<sup>\*15</sup> brahamā bisanu mahesa ika mūrati āpe karatā kāri || (Rāmakalī 12, GS, p. 908.)



カピールの言説の場合と同じように、神の唯一性を強調している点は、ナーナクが使う名称のなかに顕れる。ハリ (Hari) という名称は最も一般的であり、ナーナクの言説にはヴィシュヌ派の他の名称もあるが、ムスリムの名称も使用している。唯一の神はハリ、ラーム (Rāma)、ゴパール (Gopāla) であり、またアッラー (Allāh)、フダー (Khudā) そしてサーヒブ (Sāhib) でもある<sup>\*16</sup>。唯一なる神の顕現態は多いであろうが、その神は唯一であり他にない。

私の主は一人なり。一人なり、兄弟よ、一人なり<sup>\*16</sup>。

## 2-2. 無属性 (nirguṇa) と有属性 (saguṇa)

〔神〕自身、無属性でもあり有属性でもある<sup>\*17</sup>。

これはグルー=アルジャンの言葉であるが、簡潔に述べられている教義はグルー=ナーナクのものでもある。唯一なる神は、無属性であり有属性であり、絶対であり限定的であり、非顕現であり顕現態である。

ナーナクにとって、神は根本的に無属性すなわち絶対であり非限定的であり、あらゆる属性を欠いているのである。

〔神は〕三 (属性) を拡張して、第4〔の状態〕に住した<sup>\*18</sup>。

言い換えれば、神は三つの属性 (guṇa) を越えているのである。この絶対的相における神は、人間の理解の領域を完全に越えている。しかし

---

<sup>\*16</sup> Rāmakālī 7, GS, p. 903. スィク教の特徴的な呼称であるワーヘグルー (Vāhigurū) は、ナーナクの作品にはない。その初出はバット (bhaṭṭ) たちのサヴァイエー (savayye) である。このバットの作品がGSに表れるのは、グルー=アルジャンと同時代である。

<sup>\*16</sup> sāhiba eko hai || eko hai bhāi eko hai || (Āsā 5, GS, p. 350.)

<sup>\*17</sup> niragunu āpi saragunu bhī ohī || (Gurū Arjan, Gauṛī Sukhamanī, Aṣṭa 18 (8), GS, 287)

<sup>\*18</sup> trai varatāi caūthe ghari vāsā || (Mārū Sohalā 18 (4), GS, p. 1038)

ながら、ナーナクにとって、神が自身に属性を付与して、それによって神は自身を人間の理解の範囲内にもたすという解釈の可能性があるのである。無属性である神は自身の意志によって、人間が神を知ることができるように有属性となり、人間は神を知ることによって神との結合状態に入る。

近づきがたき無垢なる者（神）が生じ、  
無属性なるものから有属性なるものとなった\*<sup>19</sup>。

ここで、誤解が生じる危険性がある。有属性という述語は一般的にヴィシュヌ派のバクティの関連のなかで用いられ、この慣例的な意味で、この述語は化身思想を意味するからである。しかし、ナーナクと後の後継者たちの用法における有属性の意味には、この化身思想の意味はないのである。ナーナクの用法では、有属性という述語は神人同形説に似たものとは何の関連もなく、神性の内在性に関連するものである。

### 2-3. 創造

グルー＝ナーナクは、自己の宇宙論を「マールー・ソーヒラー」(Mārū Sohalā) 15の讃頌で次のように始める。

一億、一兆（無限）の暗闇。  
大地も虚空もなく、〔神の〕無限の教令〔のみ〕\*<sup>20</sup>。

ナーナクは、その後、存在しなかったものを長く述べるが、神とその教令以外に何も存在しなかったことを主張するためである。原初的カオスの開闢論を思わせる描写である。

ナーナクは最後に、次のように述べている。

---

\*<sup>19</sup> avigato niramāilu upaje niraguṇa te saraguṇu thīā || (Siddhi Goṣṭi 24, GS, p. 940)

\*<sup>20</sup> arabada narabada dhundhūkārā || dharāṇi na gagana hukamu apārā ||

〔神は〕 気に召すまま世界を創った。支えもなく〔神は世界を〕 拡張した\*<sup>21</sup>。

〔神は〕 プラフマー、ヴィシュヌ、マハーシャを生み出し、マーヤーの迷妄を広めた\*<sup>22</sup>。

神の創造活動の描写はたくさん頻繁に述べられているが、それは神の人格の観念を明らかにしてくれる。この点に関してカビールとの比較が興味深い。カビールの言説のなかにも神の人格性が述べられているが、それは直接的な表現というよりもヒントや暗示的な表現によってなされている。カビールの場合、創造者としての神への言及は稀であり、ナーナクが宣言しているような明確さはない。このことは、神の他の属性の観念についても同様である。

生類、ジャーティ、色の名前。

すべては書かれた、〔神の〕 流れるような筆で。

この文書がどのように書かれたか誰が知れよう。

この文書が書かれ〔続けられたら〕 どんなに〔長く〕 なるか。

なんという力か、美しい形か。

なんという贈り物か、誰も想像できまい。〔神は〕 拡張した、一つの命令によって。

そこから何十万もの流れが生じた\*<sup>23</sup>。

無畏、無相なる真実在の名号、それが全世界を創った\*<sup>24</sup>。

---

\*<sup>21</sup> GS. p.1035.

\*<sup>22</sup> jā tisu bhāṇā tā jagatu upāi || brahamā bisanu mahesu upāe māiā mohu vad-hāidā || (GS. p.1036)

\*<sup>23</sup> jā jāti raṅgā ke nāva || sabhanā likhiā vuṛi kalāma || ehu lekhā likhi jāṇai koi || lekhā likhiā ketā hoi || ketā tāṇu suālihu rūpu || keti dāti jāṇai kauṇu kūtu || kitā pasāu eko kavāu || tisa te hoe lakha dariāu || (Japji 16, GS. p. 3)

\*<sup>24</sup> nirabhaū niraṅkāru sacu nāmu || jā kā kiyā sagala jahānu || (Vār Āsā Saloka 2, Pauṛi 5, GS. p. 465)

## 2-4. 保持

神は世界を創造するばかりではなく、世界を見渡し面倒を見る。

〔神は〕 創った世界を見て、〔それらに〕 仕事をもたらした<sup>\*25</sup>

他の詩節は、神の創造と保持の活動を強調している。

真正の創造者は真実在と知れ、真正の保持者と。

自ら自己を荘厳し、真実在は不可視で無限なり。

〔神は〕 二つの碾き臼<sup>\*26</sup>を結び離れた。正師がいなければまったくの暗黒。

太陽と月を創って、昼夜は〔神の〕 思慮にしたがい動く<sup>\*27</sup>。

この後半の詩節も、根本マントラに使われていて、ふつう「自立 (の)」、 「自在 (の)」と翻訳される *saibhana* という言葉の意味を示している。神は自身を創造するのである。人間にとってこのことは意味を持たない。しかし、人間の理解力は限定的なのである。神の「自立性」は、神の絶対性を確証するものであり、人間の理解力は、これ以上進むことはない。グルー=ナーナクにとって、完全に充足状態にある神は人間の知性を超越し、人間はその無限なるものを取り囲む以外に、その完全態を理解することはできないのである。

## 2-5. 破壊

神は唯一であり、ブラフマー、ヴィシュヌそしてシヴァでもある。創造者であり保持者でもある神は、破壊者であり創造者でもあると述べられている。

<sup>\*25</sup> jini kīyā tini dekhīā jagu dhandharai lāiā || (Rāgu Sūhū Chanta 4, GS. 765)

<sup>\*26</sup> 天と地のこと。[Macleod, 2000, 169]

<sup>\*27</sup> jini āpīnai āpu sājiā sacaṛā alakha apāro || dui puṛa joṛi vichōṛianu gura binu ghoru andhāro || sūraju chandu sirajianu ahinisi calatu vicāro || (Vaḍahaṃsu Dak-khani 3, GS. 580)

創り破壊する者、その者のほかに誰もなし。

建てたものを壊し、壊したものを建て、立てたものを倒し、倒したものを立てる。

満たした池を干し、干した池を満たす。力ある者〔神〕は、気にせず<sup>\*28</sup>。

力ある者（神）の気に召すもののみが生じる、この世界は〔神を喜ばす〕口実。

水中、土中に、〔天地の〕間に遍満している、真正の創造者は。

真正の創造者は不可視で無限、その端は見つけられない。

〔この世に〕やって来た者は実り多きものとなった、〔真正の創造者を〕一心に瞑想して。

壊し壊して再建する、己の教令によって、保持者は。

力ある者（神）の気に召すもののみが生じる、この世界は〔神を喜ばす〕口実<sup>\*29</sup>。

## 2－6．至高性

ナーナクにとって、神は至高の存在であり、絶対の権威者であり、無限の力の保持者である。

前節のVaḍahaṃsu Alāhaṇī 1 の讃頌は、ナーナクの神観念の至高性を述べるものである。

〔神は〕気に召す行為をなんでも成し、〔それは誰も〕消すことができない<sup>\*30</sup>。

---

<sup>\*28</sup> jo usāreso dhāhasī tisu binu avaru na koi ||

bhani bhani ghaṛīai ghaṛī ghaṛī bhajai dhāhi usārai usare dhāhai || (Oaṅkāru 31, 41, GS. pp. 934, 935)

<sup>\*29</sup> jo tisu bhāvai sammratha so thīe hīlārā ehu saṃsāro || jalī thālī mahīālī ravi rahīā sācaṛā sirajāṇahāro || sācā sirajāṇahāro alakha apāro tāka antu na pāiā || dhāhe dhāhi usāre āpe hukamī savāraṇahāro || jo tisu bhāvai sammratha so thīe hīlārā ehu saṃsāro || (Vaḍahaṃsu Alāhaṇī 1, GS. p. 579)

<sup>\*30</sup> jo tisu bhāvai soī karasī kiratu na meṭiā jāī || (Gūjarī 5, GS. p. 504)

「〔神は〕 氣に召す行為をなんでも成し」、ここで、ナーナクのもう一つの特徴的な表現に出会う。同じような言葉で表現された詩節に何度も出会うが、その強調点は同じである。

氣に召せば〔神は〕 玉座を与え、氣に召せば生類は世俗を捨て行乞す。

氣に召せば荒野に水を流し、蓮華が天空に咲く。

氣に召せば生類は苦界を渡り、氣に召せば〔生類は〕 途中で沈む。

氣に召せば、その主は喜びを与える者であり、〔私は〕 賛美に専念する、徳の宝蔵を。

氣に召せば、その主は恐れを与える者であり、私は去来して死ぬ<sup>\*31</sup>。

神は、全能であり全知である。

皇帝・至高の主宰神は可視世界を創った。

〔神は〕 すべてを見て理解し、〔生類の〕 内外に遍満した<sup>\*32</sup>。

## 2-7 永遠性

神が創った世界は不安定で永遠ではないが、神自身はそうではない。

〔神は〕 存在し、また存在し続け失せることはない、〔神が〕 創った創造物は失せる<sup>\*33</sup>。

神は「不壊」(abhināsi)、「無始」(anādi)、「時を越え」(akāla)、恒常

<sup>\*31</sup> bhāṇai takhati vaḍāiā bhāṇai bhikha udāsi jīu || bhāṇai thala siri saru vahai kamalu phulai ākāsi jīu || bhāṇai bhavajalu laṅghīai bhāṇai mañjhi bhariāsi jīu || bhāṇai so sahu raṅgulā siphati ratā guṇatāsi jīu || bhāṇai sahu bhīhāvalā hau āvaṇi jāṇi muīasi jīu || (Sūhī Sucāji, GS. p. 762)

<sup>\*32</sup> (papai) pātisāhu paramesaru vekhaṇa kau parapañcu kiā || dekhai būjhai sabhu kichu jāṇai antari bāhari ravi rahiā || (Āsā Paṭṭi Likhī 24, GS. p. 433)

<sup>\*33</sup> hai bhī hosī jāi na jāsi racanā jini racāi || (Japji, 27, GS. p. 6)

(34)

なるものである。このことは、神の本性の理論的結果であるが、グルー＝ナーナクにとって重要であり、強調を要する。人間にナーナクが繰り返して主張することは、世俗への執着を捨て去ることであった。世俗への執着はマーヤー(虚妄)であり、捨離すべきものである。なぜなら、個々の人間の経験において、付与した信頼を裏切るからである。現世のいかなるものも人間の死後に随行するものはないのであり、人間にとって現象世界は捨離すべき無益なものである。しかし、この変化してやまない変易の世界に対して、不動の(acala)神が存在する。神は無染(nirañjana)であり、完全に超然(atita, alipta, nirmala, niralepa)としており、神自ら創ったマーヤーから完璧に分離している。

原初なるもの(神)は無垢・無始・不壊で、永遠に一つの姿<sup>\*34</sup>。

ナーナクが、神が不生であることを強調する際にも、同様の観念が背後にある。

虚空も届かず、主なく、不生なり<sup>\*35</sup>。

神は、死と輪廻転生を超越しているのである。

世界は神の影、神には父も母もなし。

神は姉妹も兄弟も得なかった。

神には発生も消滅もなく、家系もジャーティもなし、

その不老なるもの(神)は、[私の]心を喜ばす<sup>\*36</sup>。

ここには、化身思想のいかなる余地もないことが暗示されている。

---

<sup>\*34</sup> aādī anīlu anādi anāhati jugu jugu eko vesu || (Japī, 28, GS, p. 6.)

<sup>\*35</sup> gaganu agammu anāthu ajonī || (Oaṅkāru, 20, GS, p. 932)

<sup>\*36</sup> jagu tisa kī chāiā tisu bāpu na māiā || nā tisu bhaiṇa bharāu kamāiā || nā tisu opati khapati kula jāti ajarāvaru mani bhāiā || (Vār Āsā, saloku 2, pauṛī 4, GS, p.)

人間の愛着が現象世界から神に移れば、その結果、両者の関係は永遠に持ちこたえ、神と合一した人間は、神の不死性に参画する。ナーナクは、人間は現象世界への執着を捨てて、永遠に寂靜な不易なる神に自ら専念せよと、繰り返し説いている。

## 2-8 無形相

神の絶対性と永遠性は形而上学的な属性であるので、ナーナクにとって、神に対する人間の理解は、厳密に形而上学的なものから、より具象的なものへと進むことができるか、という疑問がおこる。この回答は強い否定であり、神像や化身を拒否するばかりでなく、神人同一的な言葉すら拒否するのである。神は無形相(arūpa, niraṅkāra)なのである。ナーナクとその後継者たちの思想では、このニランカール(niraṅkāra)という述語が神の名称の最も重要なものだった。「ジャプジー」16-19はすべて、この無形相なる神への敬礼句で終わっている。

汝は常に不易で無形相なり<sup>\*37</sup>。

「ソーラティ」(Sorathī) 3は、神がナーナクのまったく典型的な方法で呼びかけられている。

無畏、無形相にして憎しみなき全き光に〔私は〕没入す<sup>\*38</sup>。

神の無形相なることが、他の表現でなされている。

その形もいかなる線もなし<sup>\*39</sup>。

汝は何千もの眼を持つも眼を持たず、汝は何千もの形を持つも形をひとつも持たず。

<sup>\*37</sup> tū sadā salāmati niraṅkāra || (Japjī GS. pp. 3-4)

<sup>\*38</sup> nirabhaū niraṅkāru niravairu pūrana joti samāi || (Sorathī 3, GS. p.596)

<sup>\*39</sup> nā tisu rūpu na rekhīā kāi || (Sūhī Aṣṭa 1 (3), GS. p. 750)



何千もの無垢なる足を持つも一本の足もなく、香りがなくとも汝は  
何千もの香りを持つ。  
かくして私は動く（魅了される）\*40。

## 2-9 言表不可性

真正の主は原初のプルシャ（存在者）、無限にして〔大地の〕支持者、  
ラーム\*41なり。  
近づきがたく不可知で無限、際限なき最高のブラフマンで第一者な  
り。  
原初にユガの開始に存在し、また存在し続ける、他のものすべては  
偽りと思え\*42。

不可視、無限、近づきがたく不可知〔なるもの〕、その時間（死）  
もなくカルマもない。  
〔その〕ジャーティはなく不生、自存し、その〔世俗への〕愛着も  
なく誤謬もない。  
私は真実のなかの真実在に自己を捧げる。  
その形も色も線もない、真実のことばが〔その〕表徴なり\*43。

神とその住居が言表不可能なように、神の創造の教令（hukam）の表  
現も同様である。

---

\*40 sahasa tava naina nana naina hai tohi kau sahasa mūrati nanā eka tohī || sahasa pada bimala nana eka pada gandha binu sahasa tava gandha iva calata mohī ||

\*41 正統的ヒンドゥー教の説くラーマ王子ではなく、全存在者に遍満する真実在のことを指す。

\*42 sacu sāhibo ādi purakhu aparāmparo dhāre rāma || agama agocarū apara apārā pābrahamu paradhāno || ādi jugādi hai bhī hosi avaru jhūṭhā sabhu māno || (Āsā Chanta 3 (1), GS. p. 437)

\*43 alakh apāra agama agocara nā tisu kālu na karamā || jāti ajāti ajonī smabhaū nā tisu bhāu na bharamā || sāce saciāra viṭahu kurabāṇu || nā tisu rūpa varanu nahī rekhīā sācai sabadi ṅisāṇu || (Soraṭhi 6, GS. 597.)

汝の教令はいかようにも念誦（理解）できず、誰も書き留めることはできない。

たとえ百人の詩人が集まっても、〔その〕一片すら唱えられず泣く。〔その〕価値を誰も捉えられず、人みな聞いては聞いてそれを書く〔のみ〕\*44。

## 2-9 内在性

神が無限であり、人間の理解の範囲を超絶していることは、必ずしも、神が人間の認識の範囲を完全に超えているということを意味していない。しかし、カビール等のサントたちと同じようにナーナクにとって、人間の理解と経験に応じ人間の救済にとって十分な神の部分的な啓示が確かにあるのである。上記で引用した「ソーラティ」6は、次のように続く。

それには父母、息子、親族なく、愛欲なく妻もなし。

家系なく無染、無限、無終、汝の光輝がすべて〔を照らす〕\*45。

「ダナーサリー・アールティー」(Dhanāsarī Āratī) の詩節が次のように続く。

すべてに光輝があり、光輝はそれなり。

その光がすべてのなかの光なり。

グルー（導師）の教えによって、光輝は顕れる。

その気に召すものがアールティー（礼拝）なり\*46。

\*44 terā hukamu na jāpī ketaṛā likhī na jāṇai koi || je saū sāira milīahi tilu na pu-jāvahi roi || kimati kinai na pāīā sabhi suṇi suṇi ākhahi soi || (Sirī rāgu Aṣṭa 1 (2), GS. p. 53)

\*45 nā tisu māta pitā suta bandhapa nā tisu kāmu na nārī || akula nirañjana apara paramparu sagalī joti tumārī || (Sorāṭhi 6, GS. p.597)

\*46 sabha mahi joti hoti hai soi || tisa kai cāṇaṇi sabha mahi cāṇaṇu hoi || gura sākhi joti paragaṭu hoi || jo tisu bhāvai su āratī hoi || (Dhanāsarī Āratī, GS. p. 13, 663)

神の象形はすべてに遍満する光輝であり、それは、神のすべてに遍満する内在性を意味しているのである。

私の主よ、汝の行為は不思議なり。

水、土、虚空のなかに遍満し、汝はすべてに浸透す。

見る至る所に汝の光輝、汝の形はどのようなか。

〔汝は〕唯一の形で動き〔生類のなかに〕隠れる、誰も同じようではない\*47。

「見る至る所に・・・」という言葉は、ナーナクと先行のサントたちの作品には馴染みの表現である。人が見る至る所に神が見られる。なぜならば神は自己の創造世界に顕現しているからである。

主は近し、神は遠いと思うなかれ、唯一のもの（神）は全世界に〔遍満している〕。

唯一者のほかになし、ナーナク〔曰く〕、唯一なるものに没入す\*48。

全知で全能である神は、また遍在している。

汝は海、知者で見者、私は魚、いかに〔汝の〕端を知ろうか。

見る至る所に汝がおり、汝から〔外に〕出れば〔私は〕裂けて死ぬ\*49。

このことは、普遍的な真理であり根本的に重要であると認められるが、

---

\*47 mere sāhibā tere coja viḍāṇā || jalī thali mahīali bharipuri liṇā āpe saraba samāṇā || jaha jaha dekhā taha joti tumārī terā rūpu kinehā || ilatu rūpi phirahi para-chaṁṇā koi na kisa hī jehā || (Soraṭhi 4, GS, p. 596)

\*48 prabhu neṛai hari dūri na jaṇahu eko srisaṭi sabāi || ekaṅkāru avaru nahī dūjā nānaka eku samāi || (Oaṅkāru 5, GS, p. 930)

\*49 tū dariāu dānā bīnā mai machulī kaise antu lahā || jaha jaha dekhā taha taha tū hai tujha te nikasī phūṭi marā || (Sirī rāgu 31, GS, p. 25)

ナーナクは他のサントと同様にさらに先へと表現する。すべての生類に内在する「無形相なるもの」(niraṅkāra)は、創造世界のある特定の部分に内在する。

各々の心に遍く住す、森の主(クリシュナ=神)は。

水、土、虚空に密かに住す〔神〕を、グルー(導師)のことばによって見る、個我は。

地上界、地下界、天界にグル、真正のグルは〔神を〕示した、恩寵をもって個我に。

その不生のブラフマンは居り、〔永遠に〕居る、

心のなかにムラーリ(クリシュナ=神)を見よ、個我よ<sup>\*50</sup>。

唯一の聖音オーム。不死、不生にしてジャーティなく束縛なし。

近づきがたく不可視で線も形もなし。探し探して〔私はそれを〕各々の心に見た<sup>\*51</sup>。

これは、人間を元々いたところに取り残す、単なる魅力的な神秘でもなく、単なる超自然的な畏怖の源でもない。ここで、われわれは重要なポイントに立っているのであり、それは神と人間との交感が可能なところであり、それによって人間に解脱をもたらす関係性の展開が可能なところである。このポイントの把握の失敗は、致命的と見なされる。

ある者(出家者)は赤褐色の衣を着て巡歴するが、

真正のグルーなしで誰も〔神を〕得られなかった。

<sup>\*50</sup> ghaṭi ghaṭi ravi rahiā banavāri || jalī thali mahāli gupato varatai gura sabadi dekhī nihāri jīu || marata paiāla akāsu dikhāio guri satiguri kirapā dhāri jīu || so brahamu ajoni hai bhī honī ghaṭa bhītari dekhū murāri jīu || (Sorāṭhi 8, GS. pp. 597-8)

<sup>\*51</sup> (ekama) ekaṅkāru nirālā || amaru ajoni jāti na jālā || agama agocarū rūpu na rekhīā || khojata khojata ghaṭi ghaṭi dekhīā || (Bilāvalu thiti, GS. p. 838)

<sup>\*52</sup> iki bhagavā vesu kari bharamade viṇu satigura kinai na pāiā || desa disantara bhavi thake tudhu andari āpu lukaiā || (Vār Malār, paūrī 25, GS. p. 1290)

諸国を巡歴して疲弊した、汝が〔かれら〕自らの内に秘められている〔のに〕\*52。

グルー＝ナーナクにとって、まさにここで神の救済活動が示されるのである。神の教令 (hukam) のなかに、それを読むことのできる人間に神の意志が示されるのである。また、まさにここで、人間の理解に意味を付与する実体を、「ことば」(Sabada<śabda) と「名号」(Nām<nāman) が獲得するのである。まさにここで、グルーの声が聴けるのである。

世界を創り還滅した、その主を自然によって知れ。  
真実在を遠くに探すな、各々の心のなかの**ことば**を見極めよ。  
真実在を**ことば**と知れ、遠くと知ることなかれ、この世界を創った者を。  
名号を冥想する者は幸福を得る、名号がなければ勝負に負ける\*53。

近づきがたく不可知、不可視、無限〔なる者よ〕、私を心配してくれ。  
水、土、虚空に遍満して、各々の心に汝の**光輝**〔あり〕\*54。

## 2-11 神の発動

グルー＝ナーナクの教説全体に説かれた救済の様式において、人間の側の努力が必須なのであるが、それが唯一の要因ではなく、また根本的なものでもないように思われる。

ナーナク〔曰く〕、真正の皇帝が〔帰依者を〕自らに合一した\*55。

---

\*53 jini jagu siraji samāiā so sāhibu kudarati jāṇovā || sacaṛā dūri na bhāliai ghaṭi ghaṭi sabadu pachāṇovā || nāmu dhiāe tā sukhu pāe biṇu nāvai piṛa kācī || (Vaḍa-hamsu Alāhaṇī 4, GS. p. 581)

\*54 agama agocara alakha apārā cintā karahu hamārī || jali thali mahāli bharipuri liṇā ghaṭi ghaṭi joti tumhhārī || (Bilāvalu 2, GS. p. 795)

\*55 nānaka sacā pātisāhu āpe lae milāi || (Sirī Rāgu 10, GS. p. 18)

ナーナクは、救済過程の窮極である結合に責任があるのは神であると述べている。人間は、それに参画しなければならず、そうでなければ結合も解脱もあり得ないのである。しかしながら、人間の参画は先行する神の活動に依るものであり、この神の発動がなければ、人間の参画の問題は、その必要性が認識されない限り、起こりえないのである。

ナーナク〔曰く〕、仁慈深いもの〔神〕は、恩寵を与える<sup>\*56</sup>。

ここでは、ナーナクが、神の恩寵としてふつう言及されている事項を強調していることに注意すれば十分であろう。神の恩寵が、ナーナク思想全体の肝要な部分であり、ナーナクの言説のなかで常に言及されていることであるからである。この神の恩寵は、被造世界に顕現する神の活動として表現されている。その活動とは、解脱の獲得が依拠するものであり、自然法の神話版として見なされ得るような毅然とした活動ではない。自然法は、神と人間との間の交感の重要な部分と見なされる。しかしながら、自然法は窮極の基盤ではない。なぜなら、その背後に、物事を決定し人間に与えたり控えたりする意志が存在しているからである。この神の恩寵がなければ、人間は寄る辺ない存在である。しかし、神がそれを授与しようとするれば、解脱への道は開かれるのである。

## 2-12 偉大性

〔神の〕偉大さを聞いて、皆だれも言う。どれほど偉大か、見た者のみぞ〔知る〕。

どれほどの価値か、誰にも言えない。〔汝について〕語る者は、汝に没入している。

偉大な私の主は、とても深淵で、深長な徳をもつ。

誰も知らず、汝がどれほど、いかように広いかを。

注釈者がみな集まって、注釈書を編んだ。鑑定家みな集まって、鑑定した。

知者、瞑想者、グルーのグルーたち〔が集まった〕。〔誰も〕語れな

<sup>\*56</sup> nānaka nadarī karamī dāti || (Japji 24, GS, p. 5)

かった、汝の偉大さの一片も。  
 すべての真実、すべての修行〔の徳〕、すべての善徳も。スイツダ（成就者）たちの神通力も。  
 汝なくては誰も成就を得られず。〔それは汝の〕恩寵によって得られ、  
 いかなる障碍も残らず。  
 〔汝の〕称讃は汝の宝蔵を満たす。  
 汝が与えた者たちに〔ほかに〕どんな〔救済の〕方法〔が要ろうか〕。  
 ナーナク〔曰く〕、〔汝は〕真実在で、〔すべてを〕覆い尽くす者なり<sup>\*57</sup>。

真実在の名号の偉大さを少しでも。述べようとすれば〔人は〕疲れて  
 価値を得られなかった。  
 たとえ人みな集まって、〔真実在を〕述べようともし。〔その価値は〕  
 増すことも減じることもなし。  
 それは死ぬこともなく、〔人は〕悲しむことない。〔それは〕与え続け、  
 蓄えはなくなることなし。  
 〔その〕徳はこのようであり、他にはない。他になかったし、〔これ  
 からも〕ないだろう。  
 汝が偉大であるように、汝の賜物もそうのようである。  
 日を創り夜を創った者。〔その〕主を忘れた者は、生まれが低い。  
 ナーナク〔曰く〕、〔神の〕名号のない者は、卑しい<sup>\*58</sup>。

<sup>\*57</sup> suṇi vaḍā ākhai sabhu koi || kevaḍu vaḍā ḍiṭhā hoi || kīmati pāi na kahiā jāi ||  
 kahaṇai vāle tere rahe samāi || vaḍe mere sāhibā gahira gaṃbhirā guṇi gahirā ||  
 koi na jānai terā ketā kecaḍu cirā || sabhi surati milai surati kamāi || sabha kīmati  
 mili kīmati pāi || giāni dhiāni gura gurahāi || kahaṇu na jāi teri tilu vaḍiāi || sabhi  
 saca sabhi tapa sabhi caṅgiāiā || sidhā purakhA kīā vaḍiāiā || tudhu viṇu sidhi kinai  
 na pāiā || karami milai nāhi ṭhāki rahāiā || siphati bhare tere bhaṅḍārā || jisu tū dehi  
 ṭisai kiā cārā || nānāka sacu savāraṇahārā || (Āsā 2, GS. p.2)

<sup>\*58</sup> sāce nāma kī tilu vaḍiāi || ākhi thake kīmati nahī pāi || je sabhi mili kai ākhaṇa  
 pāhi || vaḍa na hovai ghāti na jāi || nā ohu marai na hovai sogu || dedā rahai na cū-  
 kai bhogu || guṇu eho goru nāhi koi || nā ko hoā nā ko koi || jevaḍu āpi tevaḍa teri  
 dāti || jini diniu karik kai kīti rāti || khasamu visārahi te kamajāti || nānaka nāvai  
 bājhu sanāti || (Āsā 3, GS. p. 2)

### 3. おわりに

以上、シク教聖典における開祖ナーナクの中心思想である神観念を概観してきた。しかしながら、膨大なこの聖典のなかには、「はじめに」で述べたように、開祖の思想は散在しており、包括的にそれを取り扱うには、さらに多くの時間と労力を要する。

たとえば、本稿にも記述した真実在（神）の「ことば」、「名号」、「グルー（導師）」、「教令」、「真実（在）」、「恩寵」といったナーナクが頻用している述語の意味の検討を進めてこそ、かれの神観念の全体像が浮かび上がるものと予測される。これには別稿が要される。

#### 【主要参考文献】

拙稿 「第2部 シク教祖ナーナクの思想」、『インド中世民衆思想の研究』、ノンブル社、459-490頁、2006年。

「シク教研究一序」、『東洋学論叢』第38号、117-136頁、2013年。

「シク教聖典編纂者グル＝アルジャンの生涯—歴史と伝承のなかで」、『東洋思想文化』、第1号、86-103頁、2014年。

Cole, W. Owen & Piara Singh Sambhi, *The Sikhs: Their Religious Beliefs and Practices*, London: Routledge & Kegan Paul, 1978. (溝上富夫訳『シク教—歴史と教義』筑摩書房、1986年)

do. *A Popular Dictionary of Sikhism*, London: Curzon Press, 1990.

Callewaert, Vinand, M., *Śrī Gurū Granth Sāhib, with Complete Index*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1996.

この他、Shiromani Gurdwara Parbandhak Committee刊行のグルムキー文字版、デーヴァナーガリー文字版、および <http://www.gurbanifiles.org/>上のテキストと辞典。

McLeod, W.H., *Textual Sources for the Study of Sikhism*, Chicago: University of Chicago Press, 1990.

do. *Historical Dictionary of Sikhism*, London: Scarecrow Press, 1995.

do. *Sikhs and Sikhism*, New Delhi: Oxford University Press, 2000.

キーワード：シク教、シク教聖典、ナーナク、神観念